



正木英辰の槌子棒・短刀(荒仕上げ品)

正木英辰の槌子棒

ここに紹介するのは、刀鍛冶が用いる槌子棒と呼ばれる道具です。日本刀は多くの工程を経て作られますが、この槌子棒は素材となる鉄を鍛えている工程のもので、先端には四角く整えられた鉄塊が載せられています。長さ56.5cm、重さ7.6kg。一見、何の変哲もない鉄の塊に見えますが、この槌子棒にはひとりの刀鍛冶の熱い思いが込められています。

この槌子棒が使われていたのは、今から140年ほど前。黒船の来航を発端として国内外が大きく揺れ動いた幕末と呼ばれる時代です。この槌子棒を使っていたのは、刀工正木英辰。英辰は川越藩のお抱え刀工藤枝英義の高弟で、当時川越城下で槌音を響かせていました。

現在活躍されているある刀匠にお聞きしたところ、この

槌子棒に載った鉄の量で3尺くらいの大太刀ができるそうです。また、小口をきちんと四角く整えるなど極めて丁寧な仕事ぶりだとのことでした。こうしたことから、これが英辰の晩年のものとはとうてい思われません。体力、気力とも充実した壮年期の作と考えられます。あるいは作りかけてやめたのではなく、「俺にはこんなすごい大太刀も作れるのだぞ」とわざわざこの工程で作業を中断したのかもしれない。

川越の郷土刀工正木英辰は当時決して有名ではありませんでしたが、こんな実力のある刀工だったのです。

それにしても、英辰はこの槌子棒でどんな刀を鍛えるつもりだったのでしょうか。



第15回ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」をふりかえって

はじめに

博物館では、毎年、1月の下旬から3月の中旬にかけて、ミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」を開催しています。この展示は、川越市の人々の暮らしの移り変わりをたどり、小学校の社会科学習の一助とするもので、今回で15回目を迎えました。

ここ数年来、学習アドバイザー（学習支援ボランティア）の制度を導入したことにより、小学生への学習支援がより一層充実してきました。

展示の内容

この展示で焦点をあてている昭和30～40年代は、経済が発展し生活が豊かになり、電化製品などが各家庭へと普及し始めた時代です。今の子どもたちの父母や祖父母の世代の方々にとって、この時代はなつかしい思い出がたくさんあることでしょう。ミニ展では、当時の駄菓子屋、台所、居間、教室を再現し、その頃使われていた生活用具や学用品、遊び道具などを展示しています。この展示を見ると、当時のなつかしい思い出が呼び起こされることと思います。それでは、ここから写真で展示をふりかえりながら、当時の暮らしを思い浮かべてみましょう。



展示室風景



駄菓子屋

駄菓子屋

駄菓子屋には、子どもたちのほしいものがいろいろありました。たくさん子どもたちが小遣いを持って集まり、お菓子やおもちゃを買って遊びました。特に、おまけつきのお菓子やくじ引きは人気がありました。子どもたちが駄菓子屋で買ったメンコやビー玉などで友達と遊ぶ様子、空き地や家の前の道路で遊ぶ様子などが目に浮かぶようです。ここで展示している資料は、昭和40年頃から市内で駄菓子屋を営んでいた方に寄贈していただいたもので、当時の様子を伝える貴重な資料です。

台所

ここでは、板の間のある台所を再現しています。板の間は作業場であり、調理場でもありました。子どもが夕飯の支度の手伝いで、この板の間に座って鰯節を削ることもありました。木のまな板、甕など昔ながらの道具のなかに、ひときわ目立つ真っ白な電気釜が見られます。電気釜の登場で、かまどで火の調節をしながら行っていた炊飯作業がスイッチひとつでできるようになり、主婦の家事労働が大幅に軽減されました。電気釜は他の電化製品にくらべ安価であったこともあり、急速に家庭に広まりました。

居間

ここでは、テレビをはじめとした電化製品が取り入れられるなど、生活様式に変化が見え始めた頃の居間を再現しています。畳の上にちゃぶ台や茶箆などが並び、家族が一つの部屋に集まりテレビの前で団欒している様子がうかがえます。柱にかけてある振り子時計は今も動いています。写真では伝わらないのが残念ですが、この振り子時計の刻む音が当時のくらしを偲ばせてくれます。



台所



居間



教室

教室

この教室は、昭和30～40年代の木造校舎をイメージして再現しています。当時は木製の机・椅子を使っていました。木の机は表面がでこぼこしていて、下敷きがなければ文字が書けませんでした。当時の授業や給食の様子など、小学生の頃のなつかしい思い出がよみがえってくることと思います。

学習アドバイザーの活躍

ミニ展は、小学校3年生の社会科の学習内容「川越市の人々のくらしのうつりかわり」にあわせて開催しています。この学習では、資料の情報を知識として習得するだけではなく、資料をとおして暮らしの移り変わりや当時の人々の生活の知恵を学ぶことが主な目的となっています。そこで、子どもたちが楽しみながら、道具の移り変わりや当時の暮らしの様子を理解できるよう、触れたり、聴いたりできる体験型の資料をできるだけ導入しています。

しかし、これだけでは、今の子どもたちが当時の人々の思いや工夫について理解を深めるには十分ではありません。そこで活躍するのが、学習アドバイザーです。学習アドバイザーとして活動していただいている方は、普段から市民ボランティアとして博物館の体験教室などで御協力をいただいている方や、博物館の同好会の方々です。

学習アドバイザーは、展示室で、当時の暮らしの様子を、自身の生活体験に基づいて具体的に子どもたちに語りかけてくれます。そして体験学習室では、洗濯や石臼、炭火アイロンの体験に協力していただいています。このようにすることで、子どもたち一人一人にきめ細かな学習支援をすることができます。また、子どもたちと学習アドバイザーの間で世代を超えた交流が図られ、子どもたちと触れ合う学習アドバイザーの姿はとても生き生きとしています。

また、子どもたちへの直接的な学習支援以外にも、体験で使用する道具や展示資料の修理をしていただくなど、学習アドバイザーはミニ展の運営にとって欠かせない存在となっています。

おわりに

ミニ展で展示している生活用具などの資料は、当時の地域文化を伝える大切な資料です。博物館ではこのような資料を収集し、来年度以降のミニ展をより充実したものにしていきたいと考えています。

次回のミニ展でも皆様の御来館をお待ちしています。

(教育普及係)



子どもに語りかける学習アドバイザー



洗濯の体験

川越の「菓子文化」について

当館では、平成16年7月17日から9月12日にかけて、「菓子職人の道具―川越の菓子文化を探る―」と題する収蔵品展を開催いたしました。会期中は、さまざまな菓子作りの道具類に見入る方、昔のお菓子の思い出話に花を咲かせる方などが見受けられました。ここでは、今回の収蔵品展においていくつか明らかになったことを簡潔にまとめたいと思います。

一般的に江戸時代は、現在でもなじみ深い和菓子の原型が整った時代とされています。川越には、江戸時代後期から明治初期にかけて「餅菓子仲間」がありました。これは川越十組仲間という同業者組織の内のひとつで、砂糖仲間や菓子種(原料)仲間などとともに八番組に属していました。「餅菓子仲間」の実態は明らかではありませんが、他の仲間と同様に、価格や流通などについて議定していたものと思われます。喜多町の名主を勤めた水村家の文書によれば、幕末の慶応年間(1865~68)には城下の菓子屋を中心に約50軒が名を連ねています。その構成を見ると、川越藩の御用商人を勤めるほどの大きな菓子屋を筆頭に、小さなよろず屋にいたるまでほとんどの店が加入していたと考えられます。

当時は、饅頭、蒸菓子、せんべい、餅菓子、あんころ餅、落雁などが売られていたようです。しかし、一般の人々にとっては、特に砂糖を使ったお菓子はめったにお目にかかれるものではなく、江戸時代後期に編さんされた『武州川越善行録』には、病気の父親に砂糖菓子を買って食べさせてあげた少年が、親孝行な息子として取り上げられています。なお、川越近郊の農村の中には、丸いおこし飴や祝儀・不祝儀の際の下菓子が売られていた村もありました。農村では農作業をしながら味わえるということで丸いおこし飴は重宝したのではないのでしょうか。

かつて高沢町(現元町2丁目)周辺には、お菓子の原料となる砂糖や水飴を扱う問屋が集まっていた。明治時代になると、この高沢町を中心に現在の菓子屋横丁が形成されていきます。今回、横丁に残っている明治10年代の帳簿を拝見したところ、砂糖や砂糖蜜を高沢町の問屋から、また、水飴を川越周辺の米穀が取引されていた志義町(現仲町)の問屋から仕入れていたことなどがわかりました。

明治44年(1911)の『川越商工案内』には、「当町菓子商は其数頗る多く、単に附近の需要を充たすのみならず、他地方へ輸送するもの亦少なからず。近來は西洋菓子をも製出して、其風味中央都会に譲らざるものあり」とあり、当時の様子を如実に伝えています。この頃になると、江戸時代以来の和菓子に加え、川越の菓子屋にもマシュマロやビスケットなどが登場しました。一方で、この地方の名産であったさつまいもを使ったお菓子も作られ始めました。このような川越独自のお菓子は、当初はお参りや観光などで川越を訪れる人々のおみやげとして広まったようです。今回の収蔵品展では、現在川越名物として



打ち物(落雁)の木型

知られる「いもせんべい」のかまどを再現し、大小の「型」などを展示いたしました。

さて、時代は下って大正末期から昭和初期にかけて、菓子屋横丁は製造・卸の最盛期を迎えます。この頃横丁で作られていたのは、おこし、かりんとう、大型打ち物、水ようかん、ニッキ板、金花糖、金太郎飴などであったといわれています。今回展示した道具類は、主にこの頃から昭和30年代にかけてのものでした。大切に残された道具類からは、菓子職人たちの菓子作りに対する思い入れを感じ取ることができました。

このように、川越の「菓子文化」は川越およびその周辺の人々に支えられ、太平洋戦争で砂糖などが不足した困難な時代も乗り越え、今日まで育まれてきました。川越に限らず、ふだんからなじみ深いお菓子は、長い歴史と菓子作りに関わる人々の思いが隠し味となっているようにも思えます。

終わりに今回の収蔵品展に際し、御協力いただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

(学芸係 小茂鳥貴夫)



「いもせんべい」のかまどの再現

桶 職

城下町川越の伝統的な職人の
仕事場を再現する「川越の職人」
コーナーでは、毎年1回の展示
替えを行っています。

平成17年11月頃までの展示



桶とは、さわらや杉の板を円筒形に組み立てて箍^{たが}で締め、
底板をつけた容器のことです。桶には、風呂桶、盥^{たらい}、水桶
など、様々な種類があります。この桶を作るのが桶職人です。
また、桶職人は醸造用の樽なども作りました。

桶職人は、様々な道具を使用して桶を作り上げていきます。
まず木材から板を割り出します。桶の外側となる面を外セン
(両手で使う削り工具)で、内側となる面を内センで削り、
板に丸みをつけていきます。正直台と呼ばれるカンナでコバ
(側面)を削り、板を成形していきます。板の側面を竹釘と
接着剤(昔は飯粒を練って作った続飯糊を使った)でつなぎあ
わせ、桶の形を作ります。ウチマルガンナで内側をソトマル
ガンナで外側を成形し、シメギとサイズチで箍を締め、最後
に底板を付けて完成します。

かつて川越にあった「多賀町」(現幸町)という地名は、
本来「箍町」と書き、箍を使用する桶職人が多く住んでいた
ことに由来します。また、慶応3年(1867)の「武州入間郡
川越町諸色明細帳」からは、6人の桶大工がいたことがわか
ります。川越周辺の農村部では肥料や水を運ぶ際に使われ
る容器として、町場でも酒や醤油を製造する際に使われ
る大型の容器として、多くの桶が作られたためと思われる
ます。その後も、川越桶商組合をつくるほど多くの桶職人
がいましたが、昭和40年代以降は、プラスチックやステン
レスの製品が増え、木製の桶を使う人も少なくなり、それ
に伴い桶職人も減り、組合も解散となってしまいました。

今回、お話を伺った喜多町の荒井修一さんは、桶職人と
して3代目にあたります。手桶やおひつなどの小物から、
風呂桶などの大物まで作り、最近では花器やミニチュアの
桶なども手がけているそうです。桶を作るには、木材を見
極める目や、道具をうまく使い分けるなど、長期間の修業
と熟練の技が必要です。今日では職人のなり手も少なく、
川越での技の継承者はいなくなるそうです。時代の流れと
はいえ、職人の技がなくなるのはさびしいことだと思いま
した。

今回の展示に際し、荒井修一氏、資料寄贈者の関巳喜治
氏、福田和子氏に心よりお礼申し上げます。



外センと内セン



正直台

川越城本丸御殿は、江戸時代末に建てられた貴重な建物遺構です。全国的にみても「本丸御殿」として残る建物遺構は、掛川城(静岡県掛川市)・高知城(高知県高知市)と合わせて3例(注1)しかなく、川越城を除き、他は国指定重要文化財になっています。城と言えば天守閣というイメージがありますが、天守閣は住居ではないので、城主は御殿と呼ばれる建物で生活していました。

川越城の場合、現在の博物館の位置にあった二の丸御殿が城主の住まいでしたが、弘化3年(1846)に焼失したため、そのとき空地だった本丸に御殿を建てました。この建物が本丸御殿で、現在残っている建物は玄関と広間部分で、当時の広大な本丸御殿のおよそ1/6にあたります。

江戸時代において、城の改修は幕府の許可が必要であったといわれていますが、実際には普請が許可制で、作事は事後報告でよかったともいわれます。普請とは土塁・石垣の新設・修築、堀の開削・浚渫しゅんせつなどの土木工事を意味し、作事とは御殿や櫓やぐらのほか城内の建物の新築・増改築などの建築工事を意味します。また、城の改修の際には図面に改修箇所を記録して2部作成し、幕府と各藩が保管していました。つまり、幕府は全国の城の現況を把握していたということです。残念ながら、幕府が保管していた図面はほとんどが火災で焼けてしまいましたが、藩が保管していた図面は一部が残っていて、改修箇所に付箋をつけて書き込みされていたことがわかっています。

さて、現代の日本家屋の柱間は1間=1.8m≒6尺で建てられていますが、本丸御殿は1間=6尺5寸を基準に建てられています。御殿のような大型の建物では1間=6尺5寸の基準尺を採用することが多く、江戸城の富士見櫓や先年前橋市で発見された川越城内建物の建地割図では「富士見櫓」が同じ6尺5寸の基準尺であると推定されています(注2)。ちなみに、同じ城内でもやや規模の小さい「虎櫓」・「菱櫓」は1間=6尺4寸、上福岡市から本丸御殿西側に移築した「家老詰所」は1間=6尺を基準尺としています。

本丸御殿が建てられた江戸時代、職人たちはこの基準尺をあらかじめ決めておいて、詳細な

設計図も作らずに工事をしたといわれています。つまり、当時の職人は桁行けたばき(棟と同じ方向の長さ)と梁行はりばり(棟に直交する方向の長さ)、基準尺があれば、間取りがイメージでき、建物の構造の完成図まで頭の中に描けたということです。火災後、急ピッチで建築された本丸御殿ですが、大広間の梁などは長大な材を使用しています。その一方で家老詰所では、ほぞ穴を埋めて柱に使用している材もあり、他の建物を解体したものを資材として再利用していることも考えられます。このことは家老詰所に限らず、富士見櫓も安政の大地震で倒壊したのち、他の櫓を移築して富士見櫓とした可能性も最近の研究で推測されています。幕末の頃の川越藩は、江戸湾警固などで困窮していたといわれており、本丸御殿の再建はさらに藩の財政事情を悪化させるものだったと思われる。しかし、完成した本丸御殿は17万石を誇る川越藩主の住居として相応しい壮大な規模と豪華さを持つ建物であり、その後は郡役所をはじめさまざまな施設として利用され、今日に至っています。

この本丸御殿も昭和42年度の解体修理から40年近く経過し、補修が必要な箇所が発生しています。今後は本格的な修理に向けて調査・研究をおこない、川越城本丸御殿が将来的にもこの姿を維持できるよう、努力していきたいと思います。

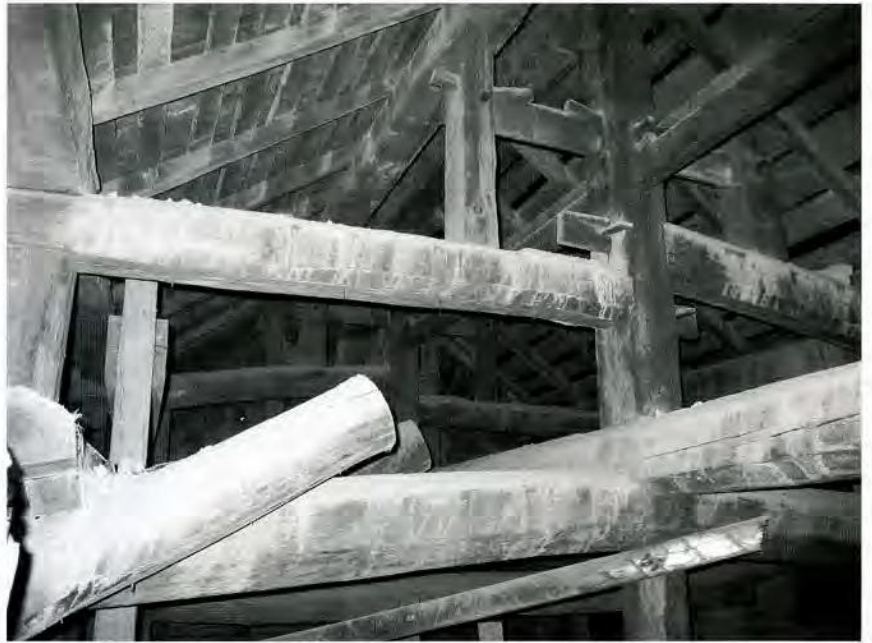
(教育普及係)



入間郡公会所として使われていた頃の本丸御殿(明治41年頃)(個人蔵)

本丸御殿小屋裏の様子

曲がりくねった長大材を複雑に組み合わせて、巨大な屋根を支えていることがわかる。材には手斧の跡が規則正しく刻まれ、職人の丁寧な仕事がかがわれる。また、柱と貫がくさびで止められており、釘を使わずに木で木をとめている状況も見取れる。



本丸御殿平面図

(注1) 『御殿建築』ということであれば、特別史跡二条城(京都府京都市)に二の丸御殿が残っているが、「本丸御殿」に限ると3例に過ぎない。

(注2) 前橋市で発見された多賀谷家所蔵の「伝前橋城建物図」は川越城富士見櫓復元検討委員会において、川越城内の建物に関する建地割図であると判断されている。その検討の際に、富士見櫓の基準尺を求めている。

第25回企画展

民間信仰のかたち—地域と講—

平成17年3月26日(土)～5月8日(日)

民間信仰とは、民間に伝承されてきたさまざまな信仰をいいます。民間信仰の中には「講」という組織をつくって神仏をまつり、有名な神社仏閣に参詣することが行われてきました。山梨・静岡両県境にある富士山や神奈川県の大山、東京都の御嶽山、群馬県の榛名山などは、霊山として信仰を集め、各地に富士講、大山講、御嶽講、榛名講などが組織され、代参と称して講の代表者が毎年参拝していました。また、こうした代参講以外にも、地域には各家で恵比寿様をまつる恵比寿講や、大工などの職人が信仰する太子講などがありました。

今回の企画展では地域にあるさまざまな講を取り上げ、講からみた信仰の姿を紹介します。

- 展示構成
- (1) 民間信仰と板碑—結衆から講中へ—
 - (2) 講と石仏—月侍供養塔と庚申塔—
 - (3) 社寺参詣と代参講
 - (4) 地域社会と講



マネキ(講中の標識となる旗)

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				博物館美術館	博物館本丸御殿蔵造り資料館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館美術館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館・美術館川越まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	800円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	600円

※()内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
第4金曜日(休日・休翌日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬予定)、特別整理期間(12月中旬予定)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様(館内消毒・特別整理期間は、博物館のみ休館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩8分
・御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

発行日 平成17年3月17日 発行 川越市立博物館
〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎049-222-5399 FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/